

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
ひらお みよし 平尾 美代志	男性	21歳	豊橋市 (富岡東部)

## 「満州からシベリア抑留生活へ」

ご本人の手記より部分転載（表現部分修正）  
長男：邦郎さん、孫：佳奈恵さんのご協力で

### ○ 満州へ そして戦争へ

昭和12年2月、私たち親子3人（祖母、母、私）は長兄の勧めで大陸に渡り、当時の関東州大連市に移住しました。長兄夫婦は大連駅近くで旅館を営み、店も開いて結構繁盛していました。

昭和13年4月、14歳の私は満州電信電話会社の社員養成所に入所、卒業後、大連中央電報電話局に入社しました。

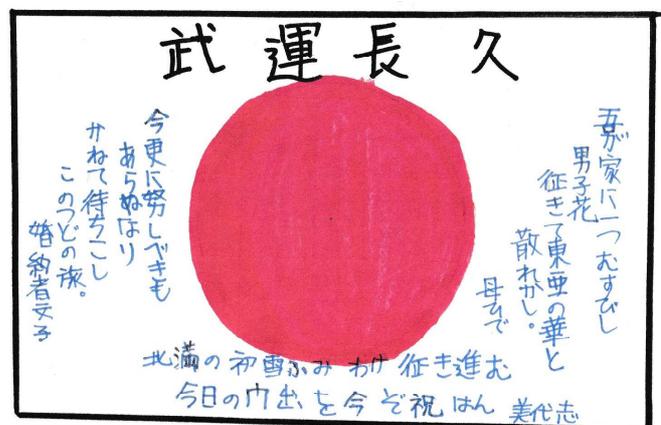
昭和16年12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争に突入しました。日中戦争は泥沼化し、満州国建国もその経営は政府の思うように進まず、多くの日本人の入植者、移民団と中国人、朝鮮人との融和策も強引な土地政策への反発など、多くの不満を抱えたままでした。当時の大連は国際都市で、南満州鉄道の本社や主要な会社、企業が集まる経済の中心地、関東軍の支配地域として多くの国や地域の人々が暮らしていました。

しかしその後、関東軍は精鋭の師団を内地や南方へ送られることとなり、中国、ソ連戦線に対応するため、満州で現地召集兵を大動員し、新たな師団を整えようとしていました。70万を超える兵員を整備する計画だったようですが、実戦経験も武器も充分でない状況下で、私も戦地へ赴く時を迎えたのでした。

昭和19年1月10日、召集令状が届きました。満州第2686部隊入営を命ず、とありました。当時はどこの家庭でも、たとえ一人息子の出征であっても、悲しむそぶりも見せず晴れの入営を命ぜられた喜びを表したものです。我が家では婚約者の文子も交えて晩餐会を開きました。その時に詠んだ歌が、右の日章旗に書かれています。



当時の大連駅近くの常盤橋通り 満州帝国の興亡より



孫の佳奈恵さんが描いた当時の日章旗の寄せ書き

## ○ 関東軍（満州国）

私は、師団第2686部隊に陸軍二等兵として配属されました。入隊初日から厳しい初年兵教育が始まりました。早朝、起床ラッパに起こされ、毎日繰り返される訓練に疲れ果て、宿舎に帰ると、食事も手早く済ませて、洗濯、銃の手入れ、身の回りの整理、整頓、そして教育係の兵長達の検査、点検が終わらないと床につくこともできません。分隊の訓練では、背のうを背負っての行軍、夜間縦走、銃剣を付けての攻撃訓練など、過酷な訓練が続きました。早く一人前の兵士に育てなければならぬ、ということだったのでしょう。ある日、班長から呼び出され、砲兵隊観測手としての訓練に入るよう告げられました。

砲兵隊は5、6人編成で連携訓練です。砲手、観測手、弾薬手等々、進入方向や距離、スピード等、それぞれの情報をすばやく砲手に伝えるのが観測手です。私は声が大きくて、計算が速かったので当てられたようです。



演習をする関東軍砲兵隊 母なる港 舞鶴より

計測員が次々と読み上げる測定値から、観測手はすばやく計算し、直距離、仰角、速度等、大声で砲手に伝達するのです。必死に訓練しました。

昭和19年3月、原隊8000余名にサイパン方面への転出命令が伝わってきました。いよいよ我らもと思いきや、初年兵は教育期間が足りず、残留の決定でした。この時に部隊から南方へ赴いた、先輩古年兵の多くが、沖縄、サイパンで戦死され、戦後も誰一人会うことはありませんでした。

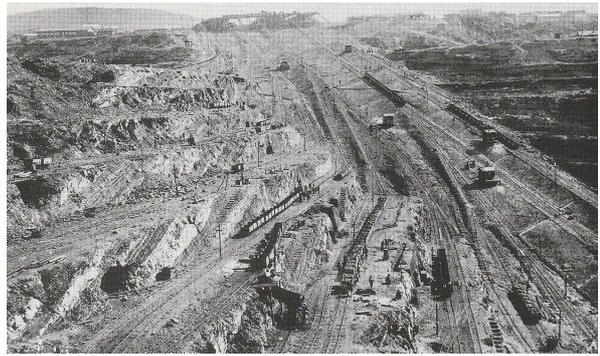
## ○ 撫順

昭和20年4月、独立機関砲第89部隊に配属され、撫順へ赴きました。撫順は、牡丹江市と同様に満州国の重要都市でした。上質な石炭の産出と豊富な鉄鉱石を元に、鞍山製鉄所を中心に、日本の鉄鋼の主要生産地となっていました。その頃、反日中国人、満人や共産党軍の破壊工作活動が頻発していたため、施設警備、日本人居留民の保護、そして防空警備の任務に就くことになったのです。

5月、アメリカのB29を主力とした大編隊が、撫順市街、鞍山製鉄所方面へ飛行中との無線を受信し、直ちに防空攻撃態勢を敷きました。いざ迎撃かと思いきや、製鉄所周辺から市街地にいたる地域を、石炭を燃やした黒煙を立ち昇らせて、低く空を覆い尽くしました。いわゆる煙幕作戦です。

隊長いわく、「各員は安全を確保し見守るべし。」私は観測手として実戦の場に臨むつもりでしたが、撫順市外の小高い丘の上でB29が大量の焼夷弾を市街地や鞍山製鉄所に雨のように降らせるのを、ただ見つめるだけでした。

30分程の空襲で、B29の大編隊は、悠々と引き揚げて行きました。中隊長の指示で被害状況の確認すると、意外にも丘陵地帯に爆弾の雨を降らただけで市街地、製鉄所とも被害は軽微でした。当時配備されていた我が隊の機関砲は、射程2000m、連続15発の発射が可能でした。高射機関砲（20mm）も同じで、射程高度も距離も2000mしかなく、B29は巡航高度5000m、はるか上空を飛行しており、届かないのです。私達の中隊は120名で6門の火砲、B29は1機で40mm機関砲を10門も持っています。これではまともな戦闘はできません。下手に発砲すれば、敵の標的にされるだけでした。



当時の撫順炭坑の露天掘り 図説満州帝国より

兵器、弾薬の不足は深刻で、私達は地面を転げまわっているだけでしたが、撫順大空襲は、アメリカ軍を「煙に巻いて終わった」のです。

## ○ 水豊ダム

昭和20年6月、北朝鮮の水豊ダム警備のため、中隊ごと転属しました。早々に敵偵察機来襲、ロッキードP38が高度3000m、3機編隊で侵入してきました。ここでも隊長は、「高度3000mでは、我が中隊の機関砲は敵に届かない。よって隊員は防空壕へ避難せよ。」と命令されました。敵機が来れば、こそこそと穴に逃げ込んでばかりで、一兵卒の私でも「恥ずかしい。」と思うのですが、交戦能力がない以上、じっと我慢するしかありませんでした。

水豊ダムは、朝鮮および満州国へ電力を供給する発電所として軍事上重要な地ですが、当時戦況の悪化に乗じて反日交戦部隊が活動を強めていました。私たちの班は現地朝鮮人を同行し、4～5日の日程で、隊と離れて遠隔地へ偵察に出向くことになりました。そんな折、私は急な発熱に見舞われました。連日40度以上の発熱と腹痛が続き、マラリアと告げられました。奉天の陸軍病院に入院するも、病状はいつこうに回復せず、少し良くなってもまたすぐにぶり返しました。この1ヶ月近い入院中に母と面会が許され、1年半ぶりに再会しました。病のためとはいえ、やせ衰えた姿で会うのは誠に申し訳なく、母の涙にぬれた顔を見るのは辛いものがありました。やっと退院を許されたのは、7月下旬でした。

## ○ 敗戦、武装解除

昭和20年8月15日正午、ラジオで重大放送があるので集結せよ、との指示があり、天皇陛下の玉音放送を全隊員整列し、直立不動の姿勢で拝聴しました。日本国はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏するとの「御言葉の意味」をしばらくは理解できず、聴き終わった隊員は様々に言い合っていました。やがて皆、膝

を折り、その場にぼう然として座り込む者、あるいは泣きくずれる者、生きて生還できる喜びを表す者もいました。隊長の指示で全員兵舎にもどり、次の指示があるまで総員待機となりました。

我が隊は比較的冷静で、現地住民（中国人、朝鮮族、満州族）の攻撃は特になく、在留邦人にも襲撃の報告はありませんでした。しかし、8月9日には、ソ連が不可侵条約を破棄し、対日参戦の布告がなされ、国境を越え満州国を一気に飲み込んだのです。関東軍はソ連の突然の侵攻に全く備えがなく、ほとんど抵抗できませんでした。在留邦人、移民、開拓団の生命、財産の保護もできず一方的に撤退し、これら邦人達を見殺し同然に置き去りにした形になりました。

8月19日、ソ連軍により武装解除、9月1日までに捕虜として、我が部隊はピョンヤンに集結を命じられました。部隊は郊外にテントを張りました。ここでは階級はなくなりましたが、秩序が保たれ、平穏で、それまでの上官達もよく働きました。周辺の施設の解体、機器の搬出、ソ連軍の接收作業、鉄道線路や市街地の復旧のため、労役につかされました。ピョンヤンでのこれら作業は、ソ連軍の戦利品の持ち出し、搬送のためでした。



ソ連兵監視のもと武装解除 母なる港舞鶴より

1年もの間、我が部隊は北朝鮮のピョンヤンの捕虜収容所にいました。終戦の混乱期に、部隊単位でどこの軍に投降するかで、その先の運命が決まったことを帰国後に知ることになりました。

## ○ モスクワ近郊へ抑留

その後、私たちの部隊500余名の全員が、シベリア移送されることになり、ピョンヤンからナホトカに集結させられました。各地から捕虜となった兵達が、ナホトカを基点にしてシベリア鉄道で内陸の奥地に向かったのです。

貨車に満載の兵は、身動きもままならぬ状態で、食事もろくな物ではなく、トイレも無く、何時間も止まる駅も無く、衛生状態も劣悪で、この辛苦にただ耐えるしかありませんでした。耐えられずに脱走を図る者、病気になる者もいました。この行軍に耐えられない者は死あるのみでした。まさに地獄行きの特別列車という有様でした。いつ果てるとも知れぬ貨車の旅でしたが、私は病を得ることもなくモスクワ郊外のプシキノ地区、森林の広がる平坦地に入りました。

昭和21年9月、250余名がこの地に降り立ちました。ロシア軍の監督官より話がありました。「今日よりこの地に兵舎（捕虜収容所）を作って、お前たちの作業目的達成の日まで、自分たちの生活の場となる施設を自らの手で作るのだ。

あとひと月，10月になれば雪が降る。それまでに，兵舎を完成せねばならない。」ロシア側は，収容所も何もかも自分たちで作れと言うのです。凍死はしたくないので，全隊員総力を挙げて兵舎完成をめざしました。

樹木を伐採し，根を掘り起こし，土を耕し，基礎を築き，切り倒した木材で柱や板をひき，屋根を上げ，給水管，配水管を埋め，電気工事をして，壁を張り，断熱(保温)のため，剥ぎ取った木の皮を屋根，壁，床等に張り，予定通りひと月で兵舎は完成しました。工兵隊出身の土木，木工，水道，そして自分は電気工事，そんな職人集団のような部隊員が一つ目的を持って作業に従事すれば，みるみるうちに兵舎を造り上げることができました。ベッド数300床の立派なものでした。我ら部隊の任務は，雪解けを待って，「マリンキドームの建設に従事せよ。」これが春からの労役でした。モスクワ郊外プシキノ収容所日本人捕虜250名の共同生活のスタートです。

ここでの日常は天候次第です。作業に出る日は森林を伐採，開墾し，開発道路を作り，各兵舎と作業場を接続する道路や監視施設も作る。鉄条網を張り，木材運搬用線路の敷設，切り出した木材を丸太に製材加工する。燃料の薪を作り溜めておく集積場を各兵舎の傍に作る。冬の凍れる大地には歯が立たないので，気温によって屋外作業は中止，兵舎内または近辺で薪割りや軽作業など様々な内容の労役をこなさなければなりませんでした。



シベリア収容所の模型 母なる港舞鶴より

## ○ 体力検査

プシキノ収容所の施設が完成すると，250名の捕虜は，その適正と体力の検査として，身体測定と称する検査を受けました。まず全員裸になりロシア人の軍医にパンツを下げて尻だしをする。すると軍医は尻の肉をつまみ，引っ張るのです。その感触だけで1～4までの等級を決めるのです。牛馬の検査のように，肉づきがよいかどうかが基準になっていたようです。

1級，2級の者は一般労務に従事，作業は8時間，3級は一般労務でも作業は4時間。4級は軽作業を2時間，他に清掃，薪割り等となっていました。我々には訳の分からない選別方法でも，従うしかありません。ちなみに私は4級の判定でしたが，電気工事の「専門労働者」ということで，毎日，しかも8時間労働の指示を受けました。他にも専門労働者（手に職のある者）はそれぞれに職責を与えられて，収容所内での作業に就くことになりました。

收容所将校から通達がありました。「日本人の捕虜諸君、君たちはソビエト連邦の大事な労働者の一員です。君たちは、わが連邦のために労役についているが、一般労働者同様、100%の働きには100%の手当てが支払われます。したがってあなた方の労働対価は、ソ連邦のものであります。ただし、貴方の收容所の250名が一致団結して、日々の労働に励み、100%以上の収益を上げれば、その100%を超えた分の賃金は分配を受けられるようにします。」

実際、隊員全員が納得の上、管理部隊員（日本人幹部）によって分配方法が決められ、個人にも賃金が支給されました。これは大いに励みとなりました。この收容所では、満州以来の戦友がずっと一緒に仲間意識も強く、軍隊時代のように上官も威張らず、何事も得意を生かして隊内をまとめていたので、祖国での習慣や行事、祭り、娯楽のための演芸会のようなことにも、この収入の一部を充てて平等に捕虜生活を送れるよう運営されました。

私は専門職、電気通信の技術者で生産率は150～180%、月額5万円相当のルーブルを分配支給されました。不思議なことに満州時代より高収入になりました。これでパンやチョコレート、ビール、タバコ、万年筆、インクなど、何でも自由に手に入りました。過酷な労働と環境に苦しんだ、他のシベリア收容所の様子とは、全く違いました。

しかし、我が隊に対する待遇は中国人、朝鮮人、ドイツ人など他国の捕虜とも違っていました。中国人、朝鮮人の捕虜は、ロシア人は見下しているようでもあり、ドイツ人には長年の恨みがこもっているようでした。



抑留者の楽しみだった演芸会 満州国最後の日より

## ○ 收容所でのエピソード

### ① 休日

休日の外出は、なかなか許されませんでした。報酬を得られるようになるとロシアの衛兵に金を渡し、ロシア軍の帽子と外套を借りて、買い物その他の用を足し、帰りには衛兵に土産を渡して入れてもらいました。何でも金次第で、こうして外出も自由にできたのです。もしも途中で将校に出会って何用かと聞かれたら、「敬礼をして、ヤパロスキーニズナイ、ロシア語解らない、と答えておけ。もしどこの捕虜かと聞かれたら、中国人、朝鮮人はだめだ、日本の関東軍だと言え、関東軍は強いと大目に見てくれるだろう。」と教えられていました。

### ② 作業中の事故

朝から電気溶接をしていると、銃を持って後ろにいた歩哨の兵士が、じっとこちらを見えています。私は再三、「こっちを見るな。」と片言のロシア語で言っても

まだ見えています。私は思い切ってその兵士を突き飛ばしました。すぐに、大勢のロシア兵に取り囲まれて連行されました。通訳と班長が呼ばれ、尋問を受けました。ロシア側の将校は、「捕虜の身で戦勝国の兵士を突き飛ばすとは、何ごとか。」と厳しく言ってきました。

私は、「彼の目が心配で、目を守るために、言葉が通じないので仕方なく突き飛ばしたのです。」と答えました。通訳が説明している時、先ほどの兵士が目を押さえながらやってきて、「ハラショー」と叫びながら抱きついてきました。溶接の火花を見つめていたため、溶接焼けを起こし、軍医に手当てをされたと言うのです。「あなたのおかげで大事にならなかった。ありがとう、ありがとう。」と、今度は日本語で礼を言いました。将校は、後ろ手に縛っていた私の戒めを解かせ、両手を取って、「あなたは、わが国の兵士を守ってくれた」と感謝されました。

### ③ ロシア人の親切

一日の作業を終え、帰路についたが、運転手が道順を間違えて、方角も判らなくなってしまうました。とうとう帰るのをあきらめ、探しあてた民家に一夜の宿を頼みに行きました。運転手は、「車の中で休むから大丈夫、お前たち日本人は寒いから、民家で休ませてもらえばいい。」と言って車に戻って行きました。その家は夫婦二人暮らしの民家で、自分達が捕虜であることも承知で、宿を貸してくれるのです。夜間、凍りつくような屋外に出て、物置からベッドや毛布を取り出し、バタバタとたたいてベッドを整え、「ここで休め」と言うのです。

夫婦は、ペチカの傍らのソファーに寄り添うようにして、寝てしまいました。厳寒の地で、敗戦国日本人捕虜のために、自分達の寝床を提供してくれたのです。温かい心遣いがありがたくて、一晩中涙でなかなか寝つけませんでした。

### ④ ドイツ人捕虜

ドイツ人捕虜集団が、近くで水道管の埋め戻し作業をしていました。10人程の作業員が、ハンマーやノミを持って凍りついた地面をコツコツと割り砕き、穴を掘り、水道管を掘り出して新しい水道管と取り替えていきます。凍てついた大地はノミを打ち込んでも簡単には割れませんが、それでも黙々と作業を続けます。

我々はまず、「薪拾い」、「小枝の伐採」です。それを、氷の土の上に敷き火をつけます。どんどん焚き、半日ほど焚き火をして、体も温まった頃に持って来たスコップで氷の融けた大地を、皆で力を合わせて、セッセッと穴掘り、埋め戻し、1時間もせずに作業は終了します。厳寒の満州で生活してきた、土工、水道設備工、そうした専門職の工兵たちの知恵と、適切な指示で楽々と1日の工程を終了してしまいます。スコップだけ持って出た我々の方が、ドイツ人捕虜たちより先に帰るのです。収容所の捕虜の扱いは、何かにつけて日本人は他の国の捕虜たちよりも優遇されました。もちろん最初は我々もノミを持たされて作業に出たのですが、独自の工法を認められ、誇らしく感じるのです。

## ⑤ 数を数える

收容所生活しゅうじょうじよに慣れてくると、20人以上の人数で作業場に向かう途中とちゆうで、パン工場の前まで来ると、5人程の人数を置いていきます。捕虜ほりよのアルバイトです。歩哨ほしやうの兵は、收容所を出るときの人数と作業場に入った人数が、5・6人違っても気づきません。收容所にもどる時の点呼では、5人ずつ並ばせ、一つ、二つと数えて、五つ（25人）全員帰着、と人数が合っていれば途中の過程はいつでもよいのです。途中の数はよく解らない様でした。

我等250名の隊の点呼は、一部の将校しょうこうにしかできないようでした。ロシア軍将校にも自国の兵の能力は解っているようで、日本人、ドイツ人は一兵卒まで優秀いっぺいそつ ゆうしゆうだとよく言っていました。捕虜收容所において、基礎学力や専門知識を身につけることができた日本の教育のすばらしさを実感しました。

## ○ 帰国

3年、1000日にも及ぶロシア郊外プシキノ收容所は、他のシベリア抑留者よくりゆうしやの捕虜生活、強制労働の様子とは違っていたようです。しかし、ここに記したことはすべて事実です。当初は厳しい寒さと開拓作業は、確かに苦しいものですが、250名の団結力と創造力は強力で、その秩序はよく保たれていたと思います。

昭和23年10月、全員の帰還が決まりました。手を取り合い、抱き合っ喜びを分かち合いました。全員に新しい軍服が支給され、收容所長から3年間の就労に対する謝意の言葉と労いの言葉をいただきました。收容所を出る時、衛兵、歩哨達とも握手を交わして、それぞれの3年間に決別したのでした。

モスクワを出発した時、日本に帰れる実感はまだありませんでした。もう満州国は無くなっていましたが、今さらながら大連の母、婚約者の文子、その安否も知れぬままでした。3年を過ごして自分は、ウラル山脈を越えてシベリア平原を東へ、東へ走り続けます。

ようやく潮の香りのするナホトカへ、長い列車の旅を終え、帰国に向けた手続きを済ませ、いよいよ船上に上がると、遠くモスクワの空を思い涙する者、喜びあふれる笑顔で日本の方角を見つめる者、それぞれに万感の思いでした。長かった捕虜生活から生きて帰ることができたことに感謝の意を表し、全員で「赤旗」の唱和で、ナホトカ港を後にしました。

昭和23年11月3日、私は舞鶴港へ帰還することができました。そして、満州にいた私の家族は、みんな無事に帰国していたことを書き添えておきます。



岸壁で引揚者を出迎える人々 母なる港舞鶴より